

## 『ウルマ（うるま）新報』にみる 戦後の文化財保護胎動期における関係記事について

園 原 謙

(沖縄県立博物館)

In relation to articles as to Okinawan cultural properties on "Uruma Shinpo"  
newspaper published in Ishikawa after World War II

KEN SONOHARA

(Okinawa Prefectural Museum)

### 1はじめに

沖縄県は、沖縄戦において住民を巻き込んでの地上戦を経験した唯一の県である。1945年4月1日から火ぶたを切った地上戦闘は、沖縄本島の北谷・読谷海岸一帯から連合軍の無血上陸によって開始された。一般的な戦闘形式において上陸戦は死相を究める戦闘であることが常である。しかしながら、この戦闘においては、日本軍守備隊は無防備の状態で上陸を許したのである。ここに沖縄戦が長期戦になったことを示唆する論拠がある。後方支援部隊をあわせて55万の米軍（連合軍）に対して日本軍は全国各地から召集された兵士が65,000人、加えて、沖縄現地で調達された満17歳から45歳の男子で組織された防衛隊約22,000人を加えても9万人足らずの戦力の下で、5倍強の戦力と立ち向かうことになった。

その結果は、米兵・日本兵に加えて住民を巻き込んだ死者の総数は、20万余にのぼることとなった。米軍においては、太平洋戦争最大規模の犠牲者は12,520人を数えた。日本兵は、65,908人の犠牲者。そして最大の犠牲は、15万人ともまた、一説によると、20万人ともいわれる一般住民の犠牲であった。

石川を中心とする本島中部では戦時中から戦後の胎動がみられる。戦後の沖縄の人々の生活は、収容所生活から始まることとなった。本島内には13の収容所ができた。北部を中心とした収容所で、北部に避難・疎開した住民の人口は爆発的に増加することになる。人々はそこでの居住することが強要されることになった。人々が自分のムラに帰郷できるのは、半年から一年の歳月を要した。1945年10月から翌年の6月にかけて移動が実現することになる。

多くの尊い人命に加え、日本とは異質の歴史と文化の中で育まれてきた王国を偲ばせる

多くの有形・無形の文化財は、その殆どが焼失、喪失してしまうことになった。無形文化財を支えた多くの人々が亡くなることになった。辛うじて生きていって多くの人々は、自失の中にいたといえよう。

本稿では、そのような状況下収容所の中で、1945年7月25日に創刊された「ウルマ新報」に着目し、同紙に掲載された文化財関係記事を取り上げてみたい。筆者は、大正期から復帰以前までの文化財保護の歴史を大きく3つのエポックがあると考えている。(注1) 1つ目は文化財保護の啓蒙運動の時期(大正14~昭和13)。2つ目は終戦直後から文化財保護法制定までの時期。3つ目が保護法制定による時期である。ここでは、2つ目の公立博物館の収集活動による文化財保護の時期、すなわち米軍政府によって戦後初めて設立された博物館である「沖縄陳列館」や首里市文化部を中心として設立された首里市立郷土博物館の時代と重なる時期を取り上げる。

本稿では、琉球政府における文化財保護法が制定される終戦から1954年までを、戦後の文化財保護に関わる「胎動期」と位置づけ、ウルマ新報の記事から米軍の沖縄文化に対する関心や、戦後混乱時から復興時にかけての文化財の状況を確認してみようと思う。これらの記事は戦後まもない文化財を取り巻く状況について断片的ではあるが、当時の状況を雄弁に語る基礎的資料を提供するものと考えられるからである。

## 2 『ウルマ（うるま）新報』について

「ウルマ新報」は、米軍政府による軍政の円滑な実施を図るため日本語の「広報紙」の必要から刊行されたものである。したがって、当然米軍によって言論統制された新聞であることを前提として読まなくてはならない。このことは記事として掲載されることが、米国軍政の編集方針に則した内容でなくてはならないということを意味する。

記事の内容の中心は、①戦況を伝えること、②軍政本部(米軍政府)から伝達事項、であった。『琉球新報百年史』(1993)によると、「記事はすべて、米軍の検閲うけたものしか掲載できなかつた。地元提供のニュースは、一応英訳させ、チェックをして許可したもののだけ掲載された」とされる。発行地は、住民の捕虜収容所の一つである美里村石川(現石川市)。新聞の体裁は、ガリ版刷り2頁、初号は新聞名がないまま、2号から「ウルマ新報」と名付けられた。また、6号からは活字印刷となる。

ウルマ新報は、1946年6月7日付けの社告で、「本紙は、5月22日付けを以て米軍政府並びに沖縄民政府の機関紙として指定されました」と記載されている。同紙は、46年5月29日に紙名の表記をカタカナの「ウルマ」から「うるま」に変更した。1949年8月からは、週2回の発行、そして同年11月からは日刊になる。約5年後の1951年9月10日の『琉球新報』に紙名を変更するまで「うるま新報」は866号の紙面を重ねた。

この米軍と民政府の機関紙とは、別に沖縄の人々による新聞の発行が始まった。1948年7月1日に『沖縄タイムス』のガリ版刷が週2回の発行で開始される。発行部数は、6千部。また、翌月の8月には『沖縄毎日新聞』も創刊された。

このような中で、これまで無料配布していた「うるま新報」は、財政的に脆弱化し、購読料の徴収する商業紙として体質を変更していく。48年11月19日の紙面には、うるま新報、沖縄タイムス、沖縄毎日新聞の三社による協定によって、同年12月1日より月極の購読料を10円とする旨の社説が掲載されている。

戦後の混乱の中、極度に情報が不足していた状況は容易に察しがつく。九死に一生を得た沖縄の人々にとっては、極限状況下のストレスにより重度の虚脱感に苛まれていたであろうが、それでも一番の关心事は、親、兄弟、子どもなど身内の消息であったであろう。初期のうるま新報には、「収容所からの便り」の欄で「尋ね人」が紙面の片隅を占めている。

この広報紙こそは、人々が自からの関係者の生死を確認することのできる一縷の望みであり、唯一の情報源であった。同紙がその編集者の元締めや編集方針に係わらず、島の人々が生きていく上で有益な情報を発信したことは、人々にとって大いなる希望であった。このことは、戦後発刊された新聞の先駆けとしてその種の紙面提供は、新聞の公益性を教える上で特筆される。

### 3 『うるま新報』にみる文化財関連記事について

戦後、琉球政府による初の指定文化財が誕生したのは、1955年（昭和30）1月7日のことであった。当然ながらこの指定には根拠となる法令の整備が必要であった。琉球政府は1954年（昭和29）6月29日に文化財保護法を制定した。この法律に基づき、琉球政府初の指定文化財が特別重要文化財、重要文化財として指定されたのである。日本における文化財保護法の制定から4年後のことであった。

文化財の取り扱いについて、時の権力者米軍はどのように考えていたかを記事を通して検証してみたい。その扱い方になんらかの傾向や方針などがあるのであろうか。ここでは866号の紙面のうち、創刊以来米軍政府・沖縄民政府の情報紙として半官半民のいわば「御用紙」的立場から自立的商業紙として歩みだした1949年末までを対象にする。うるま新報の商業紙としての歩みは、1948年7月1日に創刊された『沖縄タイムス』（ガリ版刷り、週2回、6千部）や同年8月に創刊された『沖縄毎日新聞』、また1949年秋には『琉球日報』や『沖縄ヘラルド』などの創刊により独占紙として地場が揺らぎ、新聞競争が激化するようになった49年頃と考えてよい。したがって、便宜上ここでは、創刊の1945年7月から1949年末までの約4ヶ年と半年間の288号にわたる紙面を対象にして検証すること

にした。

ここで規定する「文化財」とは、有形・無形文化財、有形・無形民俗文化財、史跡・名勝、天然記念物を含む記念物で、現在の文化財保護法で規定される文化財に係わる記事を基本にする。また、軍政府や民政府政策に係わるもので、特に「文化財」という用語は用いられないが、脈絡的に文化財に係わりがあるものは含めることとした。以上の2点の選出基準に依拠し、選出した。

うるま新報については、不二出版の『縮刷版うるま新報』に収録された「うるま新報」を用いた。選出したものの号数、発行年月日、見出しは以下のとおりである。みだしの表記は、原本によらず新漢字表記及び発行年月日は算用数字を用いた。□は判読不能な箇所である。下線部は筆者による。

### 1 第5号 45年8月22日

仮沖縄諮詢会設立と軍政府方針に関する声明

ホ、労働（三）沖縄古来の特殊技能を継続す事業を奨励し沖縄の新生活状態に相応しき新技能を啓発する事

チ、教育（二）後日高等の教育特に職業及び工芸教育制度を設ける事

### 2 第26号 46年1月16日

期待さる壺屋の復興

本島唯一の陶器の製産地たる壺屋再興の為、城間邊野喜両氏は工具を伴ひ先発隊として建設工作に従事しているが、昨今相当量の資材を入手、第一 各種陶器製作を試みたところ予期以上の好成績を収め地区隊長も優秀の折紙をつけ賞賛した 今後元住民の移動完了次第民需品製作に当るべく張切っている

### 3 第27号 46年1月23日

沖縄教育部設立

軍政府本部係将校監督の下に沖縄人の手に依る沖縄教育部が設立された旨米国海軍々政府当局から発表された 此の教育部が今後諸学校の実際的運営、教育課程の立案、教科書編纂、校長及教職員の任免、学校視察、教職員の配置、記録及一般教育行政細目の保管等の任に当たることになった 各地区軍政府将校は地区校長を援助して適当な校舎を確保し、教育運営に協力し、職員生徒の保健上必要な物資の補給を世話し、日課以外の凡ての教育的事象の報告を受けることになっている 現存する校舎にして之より重要でない他の用途に充当されているものは事情の許す限り速かに再び校舎として使用し、駐屯部隊

引揚げにより軍政府に移管された円形屋根その他の家屋も、地区軍政府将校の認可を得れば校舎転用が許され、他に適当な校舎が得られなければ木造テント張仮小屋を与えられる

軍政府普通教育方針は本部発表指令に次の如く述べられている「現在の教育計画は六才より十四才までの児童に八年制初等教育を施し、学校施設が全学童収容可能の状態にまで完備せられたる際之を義務制となし、毎週六日、一日三時間最低授業時数とし、読方算術を教授することになっている」 軍政本部に於て適當な教材の準備及徐々に課目の増加を計り、更に上級に及す準備を進めつつある 幼稚園及上級学校も設立の予定で、現在建設中のものもある

#### 4 第29号 1946年2月6日

##### 舞踊と米将兵

諮詢会文化部の肝入で成立した舞踊団は目下各地の米軍将校と住民を慰問巡演中である

記者はその状況を見るべく現場に赴き将兵の中に混ざって観覧をなし 口笛を鳴らし拍手を送って喜ぶ様をながめ「文化に国境なしの一の名言を味わった特に歌劇バザン川のユーモアとを感得するのも全く沖縄人同様であった」 物質的に総てを失い、表面未開人の如き生活状態を余儀なくされている現在の姿をみてそれが本姿であるかの如く映られがちな時、舞踊を通じて本島の持つ文化の高さに接し寧ろ度肝を抜かれた態である 蓋し今回の催しは時宜を得たものであり稍や成功と評すべきであろう 沖縄は国際的問題を多量に含む島として国際的舞台に押し出されるに至った 政治、教育、文化総てその基底よりながめ出発すべきは論をまつまでないが、果たしてしかる意味に於て国劇的文化の紹介に遺憾なきや 否や其点記者は疑いなきを得ぬ音楽の貧困さ、口団の無組織化等は早急に補正すべき問題であろう

#### 5 第34号 1946年5月15日

##### 親川の獅子舞

羽地村田井良親川の獅子舞は郷土芸能として村に伝わっていた口最近文化部の招聘により石川市で上演した所好評を博した

#### 6 第48号 1946年6月21日

##### 糸満名物爬龍船競漕盛況 (糸満発)

くん風そよぐ好天に恵まれて糸満名物の「海神祭り」恒例のはりう船競漕は二日午前八時半より同町海岸に於て花々しく展開 久しく中断されていた年中行事も漸く復活されたので町民の血潮は高鳴りお祭り気分をあおった、定刻前より近村からも見物人が押しかけ

護岸一帯は黒山を築いた 朝潮にゆれて数隻の舟艇が海幸を祈るかの如く気勢を挙げた、来賓に民政府から志喜屋、又吉正副知事以下多数を迎えたと共に御願はりうを皮切りに当日の代表呼物たるくり舟転覆競争は日頃の鍛磨の口を見せた、当日の戦績は次の通り

△御願はりう 一着南 二着中村 三着新島 △水泳競技 一着大城英仁（新島）二着金城成喜（町端）三着玉城紀盛（町端）△職域対抗競漕 一着学校、二着水産組合、三着配給所、四着町役場 △上りはりう 一着新島、二着町端、三着南

## 7 第54号 1946年8月2日

### 沖縄演技いろいろ 五日の米独立祭を飾る

米国独立祭をかざる多彩な行事が四、五、六日の三日間に亘り中城村屋宜原演芸場に於て繰り上げられたが、そのメンバーに加えられた唐手の宮城長順、久志助恵両氏外弟子の面々、サイの喜屋武眞榮氏、棒術の神谷仁清氏、妙技の花城兼盛、宮城嗣吉両氏、角力の金城正幸氏以下各選手、柔道の照屋唯松、濱川智弘両氏外各選手一同は沖縄武道紹介の重責を握って勇躍出場、熟技妙技を演じて満場の観客を熱狂させ大いに沖縄武技の真価を発揮した スポーツを愛好する米国人は沖縄独特の唐手、棒、サイ等にも興味を覚えたらしく演技中常に拍手と声援を送り、特に沖縄レスリングとして彼等の趣味と共通点を持つ角力及び柔道の試合には終始声援を送り熱狂ぶりを見せ、時に勝負なしの判定”レッド、レッド”の物言いが飛び出し結局審判赤勝ちの判定を下すやワツと歓声が揚がり拍手喝采のどよめきは七月の大空にこだまする 斯くて四、六の二日間に亘って演ぜられた演技は熱狂裡に終了、演舞を通じての沖縄紹介のこころみは上成績の成果を収めて幕を閉じた。

慰問に余興に時ある毎に紹介の労を執つて來た沖縄芸能連盟に於ても独立節祝賀行事に参加四六両日屋宜原演芸場に三回興業を以て開演、延約五、六百の観客将兵を喜ばせたが感傷的、哀愁的メロディにつれて織り出される古典舞踊に興味を覚える人は少く、ジヤズの國だけにテンポの早い快活なジユリ馬、谷茶前等は大受けで拍手のどよめきに場内も割れんばかりで何かそこに沖縄演芸の行き方を暗示するものがあり、兎に角独立祭に一異彩を放つて盛況裡に終了した

## 8 第62号 1946年9月27日

### 華麗なクリスマスカードで沖縄郷土色を紹介—軍政府委託で二万枚製作

米将兵に取つて何より楽しいクリスマス！終戦後二度目のクリスマス迄もう間近かに迫つている、昨年は終戦後、気もそぞろにクリスマスを迎えたのであるが今度は一つ計画的に将兵を悦ばせてやろうという親心からのこれまたわれわれ沖縄人にも愉快なニュースであ

る。クレイグ副長官ちきぢきのお肝入りで二萬枚のクリスマスカード 美しい沖縄の風土  
蒼空にくっきりと抜き出る棕梠に沖縄独特の草花を配したものや郷土玩具のチンチン馬小、  
ウツチリクブサー、今は思い出となった首里城の守禮門などを描きだしたカードで米将兵  
になつかしの郷土の人々へクリスマスの挨拶を送らせようというのである

初め米軍ピー、エックスではクリスマスカード三十萬枚を本国に注文する筈のところク  
レイグ副長官の口添えでその中二萬枚を沖縄の地方色が豊かで風雅なものを、ということ  
になり文化部に交渉して来た所結局山田眞山、大城皓也、大嶺政寛、山本恵一、金城安太  
郎氏らで原画をえがいてこれを工業部の方に一事業としてひきうけさせることになったも  
のである なほこれはクリスマスに限らず元旦、母の日、愛の日、復活祭の際使われるカ  
ードなどにも将来は企画されるらしく一つの事業になるばかりでなく 求めて得られぬ立派  
な米琉親善の美しい使者ともなるのである これに就いて文化部部員は語る クレイグ副  
長官の御行為で我々の方にこの仕事を廻って来たようですが、年五回もこれに似たカード  
作製の機会が与えられていて沖縄の美術工芸運動、失業救済、家庭副的趣味の向上等の点か  
ら見ても口口なかなか有効です 今回の二万枚は十月末日までに仕上げねばならぬもので  
一日六百枚を頑張っています 用具と人が不揃いで困っているが、仕ごとは我々の描いた  
のを見て模写すればよいから希望者は民政府工業部宛申し込んでいただきたい

## 9 第66号 1946年10月25日

### 芸能団確立し—三劇団俳優に審査制

沖縄芸能連盟では昨年民文化部指導の芸能家の一部を糾合して軍慰問を重ねて郷土芸能  
紹介に努めて来たが今般新たに芸能詮衝委員会を設置し去る九月二十六日十月六日の両日  
に亘り沖縄芸能家に対する審査を持ち俳優声楽家の適任者を決定 十六日民政府文化部長  
より記の五十名の芸能音楽家に対し各々資格証明書を交付した 尚劇団を知念、石川、田  
井等の三地区に常設し郷土芸能の向上と民衆慰安に乗り出すことになった

梅劇団（知念）△印團長 △伊良波尹吉、名城與助、大見謝口幸、玉城盛義、儀保哲  
也、花城ツル、慶世村清、比嘉口男、儀武スミ、宮城ヨシ、比嘉文子、比嘉照子、口間輝  
子、大嶺重口、與那嶺口信、高江洲高哉

松劇団（石川）△島袋光ゆう、鉢嶺口次、比嘉正義、親泊口照、備瀬知源、比嘉正光、  
親泊源清、玉城敏彦、伊波キヨ、嘉手川初子、小波津キヨ、渡慶次秋子、板良敷朝賢、幸  
地亀千代、川平恵永、渡慶次賀得

竹劇団（羽地）△平良良勝、濱本有保、上間昌成、宮城能造、新垣繁、高嶺口雄、吉  
本實、新垣盛松、屋宜宗勝、多嘉良カナ、新垣ヨシ子、濱本澄子、平良ヨシ子、岸本キヨ、  
宮平政美、小那覇太郎、な口親泊良安、我如古安子は都合に依り未記

## 10 第67号 1946年10月1日

### 嬉しや書籍一千冊 隣邦中国より寄贈 上海市教育局の厚情

”太平洋戦争終結の記念にわが琉球同胞に日文書籍一千冊を奉贈す”と最近隣邦支那から和書一千冊がとどけられたが、この贈り物は先の軍政府教育係将校ハンナ少佐の斡旋に依るもので本年一月に少佐が上海に立ち寄った際に、総ての文化施設を喪失した沖縄住民の為にと中国に書籍の寄贈を申入れたところ上海市教育局が喜んで引受け送付したもので（大〇海）をはじめ富山房並びに平凡社版百科大辞典、岩波版（法律学辞典）（日本文学大辞典）（東洋歴史大辞典）（金融大辞典）（日本語名大辞典）等の辞典類の他（発明家及び技術家としてのレオナルドダヴィンチ）等文学、歴史、経済、科学等各部門に関する書籍一千冊で民政府文化部で保管することとなったが先程九州の疎開先からも（新口報）の親泊政博氏や沖縄県事務所北内歌部長等の肝入りで書籍に渴えた郷里の其を贈ろうとその準備を進めているとの情報もあり、此等寄贈本はいづれ一元的に管理され、ささやかな図書館も用意して”現在何らの文化施設に恵まれぬ住民の為に”心の糧となり（オアシス）となり得るやうにとの各方面から待望されているが、これらの書物もこれに応えて手早いところ一般に利用させ口いもの楚、寄贈本には一冊毎にていねいにその見返しに（琉球同胞留口）と冒頭に朱刷傳單口が貼付されてあり、口て沖縄が支那の冊封を受けた時代から説き口び、その昔（黄色い軍艦）の援軍を待望した久米村の頑固等に隨喜されそうな漢文が綴られており、文教部でも持て余し気味のいささかこはゆい檄ではあるが、いずれにせよ仲良くすべき隣邦からの贈物だ多謝多謝と虚心たん口に受け取って然るべきあろう檄文の要旨は（前略）洪武五年明ノ太祖琉王ヲ冊封シ中山王ト為シ國ヲ中山ト號セシム我国ノ正朔ヲ奉ジ五百年を歴テ貢口タエズ（前略特ニ日文書籍一千冊を奉贈シ藉ニ断念に資ス今後口口連繫ノ口口ナヲ洞察ス 未ダ口口ノ又学ヲ習ワザル前ニ在リ、權ニ研究資料ニ充ツ有意口為 中華民国上海市教育長敬贈 三五年七月

## 11 第82号 1947年2月14日

### 記者団沖縄へ 郷土古典芸能舞踊で歓待

記者で且つ有名な出版業経営者であるロイ ダブリュ ホワード氏など九名の米有力新聞記者団一行が二月十三日 日本 朝鮮 よりの帰途沖縄に来島することは既述の通りであるが、二月四日政治部長レイトン中佐は民政府に志喜屋知事を訪問 右新聞記者団一行は米陸軍の斡旋によってこん度の旅行を試みたもので日本朝鮮よりの帰途は沖縄本島戦禍をうけた農村の復興状態及び教育状況を視察すると共に学校 民政府等を訪う予定になっていると語った なお民政府では同記者団一行の来訪を機に沖縄古典舞踊並に美術工芸品等を観覧に供し歓迎する筈である

## 12 第85号 1947年3月7日

### 沖縄を理解せよ！各部隊に講座解説 意気込む米陸軍情報教育部

沖縄に新参の米兵達に沖縄の正しい歴史、地誌の知識を与えるために米陸軍沖縄基地司令部の情報教育部では3月1日から各駐屯部隊で沖縄案内講座を開いているが講座の内容は”沖縄の戦闘”琉球の地誌、琉球人、琉球の政治経済、沖縄の名所旧蹟、等が含まれて五週間で完結することになっている”沖縄の戦闘”講座では前第十軍所属の将校が嘉数、浦添戦線、首里与那原戦線の戦闘、喜屋武掃討戦真相などの講わがあり又マリン部隊や前二十七師団将校を招へいして那覇及び北部沖縄戦闘のさせこれらの講座で太平洋戦争最も重要な戦闘の一つであった、沖縄作戦の詳細な説明がなされる筈である 沖縄地誌の講座には新しく沖縄に来た兵隊だけでなく古参兵にも又興味深い沖縄の地質、植物、動物等の講義が含まれ琉球の住民についての講座は沖縄にいる米兵に深い理解をもたせ効果的島民と協力するように仕向ける努力が払われ琉球の政治経済の講義は受講者の沖縄に対する蒙を啓き且つ沖縄の頗らしい将来を論ずるに最もよい機会を提供するものとなる筈で最後の沖縄の名所旧蹟の講座は余暇を利用し沖縄風景の写真をとろうと意気込んでいる米兵たちにとって極めて好都合のものである

## 13 第85号 1947年3月7日

### 沖縄占領初の報告 マ総司令部から発表

総司令部は三日琉球に関する最初の占領報告を発表した 昭和二十一年七月から十一月に至る五ヶ月間米軍政府が琉球で行った活動をまとめたもので口盲次の通り

**総論** 戦争が終わってから沖縄人は米軍政府指揮の下に急速に自ら口を処理するようになった 経済復興は各地からの市民の引き揚げと再定住により戦争で九十%まで破壊した住宅建設貿易及、製造業の再口計画を進め始めた 特産物工場復興二ヶ年計画は着々進行し農業経済、土木建築及び工場施設再建のための特別予算が八月に承認された 引揚げで人口は増加し六月の六十八万九千百六十翌十一月には八十一万七千百六十人となり出生率は一人につき七、五人 死亡率は同じく四、四人である 沖縄の指揮権は昭和二十年九月二十一日海軍が陸軍から責任を引き継いだが昭和二十一年七月一日にはまた陸軍へ戻された 軍政府の管轄地域は沖縄島とその西方久米島までの諸島に限られていたが昭和二十一年一月六日三十度線以南の琉球列島へ拡大した

**政治** 民政は昭和二十年九月市長及び市議を選挙し十五名よりなる沖縄諮詢会が任命されたがこれは昭和二十一年一月二日に中央行政機関に発展した四月に知事が選ばれ五月二十三日知事は沖縄議会を召集し月一回会議を開くことを認可された 軍政府の設置に伴い現行法は改訂を要するものを除き總て有効であるとの布告を発した 旧日本法規は多くが

修正と廃棄を必要としたがその検討は法律家が少なかったため遅れている 財産権は市民の多くが戦時に分散したので完全に混乱状態にあった 裁判組織及び各種法廷の管轄なども困難な問題であった 最下級の刑事裁判所が昭和二十一年四月十五日開始された 警官養成所は昭和二十年十二月十日設立 又翌二十一年十二月一月に沖縄警察部が創立された 経済 農業 戦前の水準への急速な回復は戦争の被害の外約三万エーカーの耕地が軍用地にとられた結果耕地不足のため阻害されている 他方耕作隊の手で三千エーカーを開拓農耕具と肥料六百三十四トンを配給した 十月から大東島の燐鉛石十五万トン採掘計画をたてて調査を始めた これは沖縄の需要を充たすだけでなく一部は輸出される

漁業 出漁期に入った四月から全面的に活発となり業具の不足にも拘わらず漁獲は相当な成績を挙げた 但し十一月は季節風関係で八十七メートルトンにおちた

工業 沖縄人の工業専門家からなる工業部は繊維口（芭蕉繊維）、染色（藍）、セメント、木工（下駄、家具、織機）などを生産して市場に出させている 住宅資材の生産には特別に努力されている

製糖 現在の政策が島内の需要を目標としているので戦前に比べると大して復活していない 製塩業も薪の値上がりで苦境にあるが、どうにか再開された 糸満口工所にに口物工場が近く出来るはずで打穀機六万の製造を目標に操業を始める 住宅問題は組立式の簡単な標準家屋の設計ができてから緩和された

労働 十一月の就業率は終戦以来の高率で琉球人の就業者十五万五千四十七、失業者一万四千九百六十二を記録した 八月の統計は就業者十一万九千八百口十九、失業者一万七千十三であった

貿易 外国貿易は占領初期には停止されていたが各商品の島内需要が充たされた暁には再開促進される予定 現在行われている島内通商は拡大の見込みで一方台湾は貿易の再開を望んでいる 燐鉛石の対日輸出は月平均七百五十メートルトンに達する見込みで代金は日本からの輸入品の支払いに當てられる輸入品のうちには過リン酸口一千メートルトンがあり今後三ヶ月以内に積み出される予定

金融 昭和二十一年五月一日から貨幣經濟を再開七月三十一日第一回公定物価表を公表した 銀行は昭和二十年三月閉さいしたが二十一年六月再開した 沖縄中央銀行は同年口月一日に創立された

財政 沖縄ではまだ課税は行われていない 唯一の歳入財源は各政府機関によって運営されている諸工場である 予算に口する新法律は沖縄財政部で起草され八月に軍政府の承認を得た 承認された予算中には沖縄民政府を維持するための給料、賃金の外戦争で困窮状態の者を補助するに必要な食糧、補給物資、施設などの費用も含まれる なお別に同島の経済復興計画のための予算も承認された 一方特別予算の運用で食糧増産、米国からの食

糧輸入削減、就職増加による救済費用の縮小などが実現するとみられる以上更に西表島の木材生産促進の予算も十一月承認された

社会 一ヶ月二千戸百の住宅が過去三ヶ月間に建設されたが少なくとも七万戸が必要とされた 十月末には厚生機関が七つ出来、公衆衛生部が創設された 七月一日以後沖縄へ引揚げた数は日本から八万八千七百六十六名、朝鮮から五千六百九名、マリアナから三百十九名、ハワイから四百三十一名で日本人捕虜三千六百名以上が十月に三千五百名が十一月に日本に帰還した 一月に設置された沖縄公衆衛生部には六月末には沖縄人医師六十名、病院関係者合計一千一百名 診療所百二十が所属していた 十一月までには琉球諸島を通じ医師八十名、歯科医二十三名 産婆百六十三名、薬剤師五名となった マラリアとトラホームは増加しているが衛生方面的努力は継続された 出産率は十月以降ほとんど百五十パーセント増加した 教育方面では校舎、教科書、有能な教員の不足が障害となっているが、入学率は上昇し十一月末までには学童は全部で十万八千五百一名となった 文化施設は首里市の博物館再開を初め逐次拡張されている 琉球諸島全部を通じて唯一の現地人新聞は（うるま新報）である

#### 14 第86号 1947年3月14日

##### 芸能界自活へ 芝居は四月から興行

文化部所管の芸能団はその給料を民政府予算から支給されているが、一月以降入場料を徴収し月約五回興行で二万八千八百十七圓七錢を稼ぎ自立企業の見透しもつき且き芸能団員の生活も興行収入で維持できる見透しがついたので、軍政府では三月六日知事宛芸能団員の給料を四月一日以降民政府予算から削除するよう指令した これによって沖縄芸能団は民政府文化部から独立 個人経営となり民間娯楽面を引き受けた今後の活躍が注目されている なお軍指令は口時に今まで文化部技官として民政府予算で賄われていた文化部美術部員に対してもその作品を頒布することにより生活を維持できるものとして四月以降民政府予算より某俸給支払いを打切ることになった

#### 15 第90号 1947年4月11日

##### よきかな、郷土芸術 紅型陶器舞踊紹介 米人側から好評博す

美術家グループでは米人家族に対し沖縄文化の紹介を期し去る二月十五日より約十日間知念ハイスクールで美術展覧会を開くと共に選り抜きの郷土舞踊家を集め米軍家族のために公演したが、この展覧会では紅型、花織、芭蕉布、麻織の華麗な琉球古来の服しきよくが展示され、外に数点の見事な琉球陶器なども陳列され歌舞音曲と共に沖縄固有の芸術について寧ろ米軍将校側から深い关心と高い評価を買ひ近來にない有意義な催しであった 出

品絵画は名渡山、大城、大嶺、山本、金城、糸数氏らの人物風景であった この展覧会について普天間で発行されているデリーオキナワン紙主筆ポータ氏は二月十八日の同紙上で次ぎのように紹介した

目下知念で開かれている展覧会には沖縄人が戦前につけていた華麗な数十点の着物や數名の沖縄の画家の傑作が陳列されている沖縄人は戦争のため現在のよう r な粗末で単調な服装で生活しているのを非常に恥ずかしがっているように思われる 彼等は戦前自分たちが持っていたものをわれわれアメリカ人に知ってほしいと希望している 陳列されている写真や書家の絵からみると沖縄人の家はすべて見事な庭園を持ち四季の草花が植えられていたことがわかる 沖縄人は過去に於て彼等が作った傑作に強く誇りをもっているが、この展覧会の陳列品をみた人は何人も沖縄人が誇るのを尤もだと見るであろう 扱い下げられた米軍服をつけ見苦しい掘立小屋に住んでいる沖縄人を見てきた吾々アメリカ人がこれを彼等の平常の生活姿勢だと思うのは無理もないことだが、しかし折角アメリカから遙々沖縄を訪ねた大多数の吾々アメリカ人が本当の沖縄の姿を知らないでいるとすれば、これは全く残念なことである 沖縄を本当によく知る唯一の最良の方法は知念までかけていつてこの展覧会をみるとことである

## 16 第99号 1947年6月13日

### 高級美術作品初め 土産品販路を拡充 追々輸入雑貨なども取り扱う

手工芸品等沖縄土産品は従来軍売店を通じ又はあの手この手の非合法で米軍人に販売されていたが、去る五月十五日付軍指令を以てこれらの制度は廃止又は禁止され、今度新たに軍政府監督のもとに民政府工業部経営による土産品販売店が軍政府、ライカム、泡瀬、嘉手納の四カ所に、追々牧港、石川、奥間、那霸等都合九カ所に設置されてこれら諸売店を通じてのみ郷土色豊かな陶器、漆器、竹細工等凡ゆる沖縄土産品が米軍人の手に売られることになるが、軍政府クレイグ副長官は次指令を通じて安谷屋工業部長に対しこれらの販売店で取り扱う製品をもっと潤沢豊富ならしめるよう必要な措置を講ぜよ、とうながしている、沖縄の画家達の作品もこれらの諸販売店にしつらえたギャラリーにおいて展覧し、博くはん布されることになる これら諸売店の通じてあがる利潤は民政府予算に納入されるが、経済部長ウイルソン中佐は四日の連絡会議で次ぎの如く志喜屋知事に語っている

これらの販売店は現在は米軍人を対象にしたものであるが将来は各村に設置してアメリカ輸入雑貨等を住民に販売する位に強力なものに進展せしめ度い

なお販売店管理人んは當眞し徳氏が五月三十一日任命された

17 第102号 1947年7月4日

### 飛ぶように売れる 賑とう軍政府美術手芸品売店

米軍関係への販売を目的とする民政府工業部経営の土産品売店は去る十六日月曜日から軍政府、泡瀬、嘉手納の三ヶ所で展開され、絵画、花壺、灰ざら、カラカラー、茶セット、獅子像などの陶器や阿旦葉製のハンドバック、シガレットケース、草履、オハヨウ（コツブ袴）或は竹シダ製の花籠、フルーツ籠、口口セット、屑かご、貝細工のくびかざりやボタン其の他人形切花など千余点がかざられどちらもすばらしい人気で開店初日の売れ行きだけでも数百弔に及んだようである クレイグ副長官もそのすばらしい成績を喜び開店当日 知事と工業部長を軍政府に招致し技巧もなかなか優秀だから是非奨励してほしいと次ぎのように語った

土産品販売は沖縄の大きい財産だから知事は責任をもって増産の奨励に當り将来は軍相手だけでなく民需にまで拡充してほしい 砂糖とバイナップルと牛と御土産品によって栄えたハワイと気候其の他で沖縄は最もよく似ておりしかも沖縄人は手先も器用だから特に奨励に努力するよう

更に工業部では新しい工芸品の物産を奨励する一方で販売希望の向は同部と連絡をとりいつでも出品してもらうように各関係筋に呼びかけているが、土産品にはそれぞれ軍政府の関係口と工業部で協議の上決定した定価を附し民最高価格とは全く別個に取扱いその差額は現在のところ軍指令により民政府の収入に繰入れられることになっているが、その価格は民最高価格の六割から十割位までの増になっており将来工業施設の整備と技術向上を問わず土産品販売は沖縄唯一の収入源として大きく期待されている なお民最高価格と商店価格との比較は左のとおり △阿旦葉製品 民最高値、（民商店値） スリツバ三圓六三銭（七圓五十銭）、煙草ケース 六、五六（一二、五〇）、ハンドバック一四、〇四（二二、五〇）、カゴ一二、五〇（二〇、〇〇）、テーブル掛一二、五〇（二〇、〇〇）、茶わん入れ二、八二（五、〇〇） △竹製品 果物かご 一七、一六（二五、〇〇）、同（小）七、口九（十五、〇〇）、裁縫箱七、一〇（一二、五〇）、整理箱一〇、二三（一七、五〇）、同大二二、一一（三五、〇〇）、紙屑入れ二七、〇六（四二、五〇）、同小一四、一九（二二、五〇）、煙草セット四六、八六（七〇、〇〇）、化粧品入れ一三、五三（二〇、〇〇） △しだ製品 かご小六、六〇（一〇、〇〇） 同大八、一四（一一、五〇） △陶器類 花壺五、二八（十〇、〇〇）、口上製品 一〇、六一（一七、五〇）、灰さら 八、〇五（一二、五〇）、コマ犬二〇、一三（三〇、〇〇） 同色付け二二、七七（三二、五〇）、同小型七、五七（一五、〇〇）、キース四、一六（一二、五〇）、酒セット三、〇五（一二、五〇） 口立 三四、七六（六〇、〇〇） △雑之部 貝ボタン一、五〇（二、五〇）、貝製くびかざり六、八五（一〇、〇〇）、ゴザ二四、〇〇（三七、五〇）、人形一九、七九（三二、

五〇)

18 102号 1947年7月4日

大宜味芭蕉布も復活

大宜味村に於ては六月二十一日午前十時より大宜味村実業高等学校において戦後初の各種品評会を開催 名にし負う芭蕉布を筆頭に木工、竹工、棕梠、阿旦、蘭草、鍛力工作品其他実類など多数展示し、午後二時より審査報告賞品授与式を挙行した 當日出品の芭蕉布は染色材料機具等の困難に打ち勝って絹物縞物など見事な出来栄を見せ戦前に劣らぬ優秀品が出揃つたことは大宜味芭蕉布今なお健在であることを思わせるものがあった その他の手芸品も土口材料を利用し創意を生かしたものでいずれも立派な手際を見せた なお式後村民角力大会並に競漕があつて六月御祭の賑やかな行事を終わつた

19 第105号 1947年7月25日

脚本募集 賑わう劇界

演劇の衰微沈滯は一般常識の憂えるところであるが、これも結局は脚本のひん貧からきているものとして 民政府文化部では今度賞金付きで新しい脚本を募集することになった募集事項は次のとおり

脚本募集要項 △題材随意 再建沖縄を表現し民主主義なるもの 軍国主義的封建主義的なもの敵国人権の不平等卑猥なものは不可 △当選作品は来る十月（予定）第一回芸術祭に於て三劇団並びに演劇研究団体の競演用脚本に充てる △賞金一等 千圓 二等五百圓、三等二百五十圓 △来る九月三十日迄に民政府文化部宛に原稿を送ること

20 第105号 1947年7月25日

梅劇団の美学

戦禍をまぬがれ戦前の姿のままをとどめていた羽口口の整頓された学園は見る人に心強い思いを与えていたが去る二月の失火で鳥合に帰し千名の学童は分散教育の悲惨な目にあつていたが、梅劇団は那覇人会の世わにより去る六月二十五日より四日間、学校建築資金募集のため田井等劇場に於て演劇会を開催 総額一万五百四十二圓の入場料を全額村当局に寄贈し、演劇に要した経費は無論御禮も一切拒絶してアッサリ引揚げたが、この義挙に感激した同村では校舎再建に全力を挙げ真喜屋我部祖嘉初口も九分通り完成した

21 第106号 1947年8月1日

見事落第 新切手の图案に苦心

六月十七日民政府郵務課から軍へ提出した郵便切手郵便葉書の図案は全部が時勢にそぐわぬ人民とは無縁のものだとばかり何れも落第 ことともあろうに左三ツ巴や王冠、黄金のかんざし等首里王朝に因んだものばかりで守禮の門の図もはねられてしまった（封建復古は真平御免）だと（民主主義沖縄の誕生）を期待する米軍の拒否の言い分が面白いと同時に多くの示唆するものがある △凡ての提出図案は十二世紀から一八七九年まで琉球を支配した王朝（尚家）の象徴である 琉球王国は日本に合併され沖縄縣として組織された王の子孫は東京に住み日本の華族に列せられている △左三ツ巴紋の紋章は琉球王朝の象徴である △守禮の門は琉球の全王宮前に立った門の絵である △王冠かんざしは多分琉球王のものであろう △提出図案は芸術家によって考案されたかどうかわからぬが 琉球王朝の子孫の宣伝手段として役立つであろう といったわけで民主主義に遠いものがあるとし変更を勧告されたものである そこで郵務課では早速梯梧の花 蘇鉄、百合等沖縄のフローラを表現したものや沖縄口図に鳩を配したものを作成したら見事パス 近く七種の切手デザインを決定することになった

## 22 第108号 1947年8月15日

### 圓覚寺の巨鐘 比島から還る

今は昔 首里はうつ蒼たる繁多山に四百余年来の建築を誇った名さつ 国宝指定の圓覚寺は首里城と共に鳥有に歸し 今は文字通りその片鱗を首里博物館に残すのみとなつたが圓覚寺のぼん鐘はどうなつたのか 沖縄一と称された巨鐘は焼け残つた筈だが、その行方は何処か 去る二十二日政治部長レイトン中佐の段（談）に依れば この巨鐘は現在フィリピンに健在し、米海軍軍政府管下時分に腕に錨を入墨した海兵隊が戦利品としてフィリピンに持つて行ったが 今度軍政府の斡旋により郷里沖縄に帰り 住民と相見えることになるとのことだ 民政府では大典寺跡に残存する鐘楼を民政府庁舎前のロータリーに移し、この巨鐘を吊し時鐘にするとのはなしである 評ては首里城下に朝な夕な諸行無常の響きをつたえたこの鐘も戦争の洗礼を受け遙々海を渡つてフィリピンくんだりまで修行にゆき更生した 今や必ず沖縄の蘇生を世界に告げる暁鐘でなくてはなるまい

## 23 第115号 1947年10月3日

### 各界の学究を糾合沖縄文化協会生る 近く東京で”沖縄民芸展”を開く

米本土及びハワイに沖縄友の会や沖縄救済財団が結成されて側面から沖縄復興に援助を与える運動が興されつつあることは本紙口報の通りであり、日本本土に於ては沖縄人連盟及び沖縄人会が結成されて日本在住六万同胞の生活援護運動を展開すると共に遠く郷土復興に声援を送つてゐることはすでに（自由沖縄）及び（口民報）を通じて我々が知る通り

であるが、今般東恩納寛じゅん氏や仲原善忠氏等東京在住の沖縄出身著名文化人が中心となって、柳田国男、折口信夫、新村出、田辺尚雄、柳宗悦、稻垣国三郎氏など沖縄研究の権威を網羅して沖縄文化協会が設立された旨会長仲原善忠氏からこの程志喜屋知事宛便りがもたらされた 同会は沖縄古典の蒐集にあたり、(球陽)の復刻ももくろまれているが、十月頃折口信夫氏の講演を開催する口、柳宗悦等が沖縄民芸関係の展覧会を催し沖縄文化の紹介に乗り出すことになっている なお同会は司令部の了解を得て、貿易庁を通じて雑誌六万五千冊鉛筆七万五千本及下村湖人著(次郎物語)八十冊を郷土沖縄に寄贈すべく手続を終えたとあるから、これらの温い贈りものがとどくのも遠くなかろう

24 第115号 1947年10月3日

#### 資料を蒐集 古美術工芸品も登録

民政府文化部では先に首里博物館による首里城跡に琉球古文化を再現しようとの総合博物館に就いて又吉康和、島袋全発、山田有幹、原田貞吉等の諸氏を招いて研究をなしたが、さしあたり現在の首里博物館を移転改築することと民間に散逸している沖縄文化資料の蒐集がまず急務であるとし、例えば浦添城しのゆうどれ等の古ふんの発掘は保存を考えると共に日本に渡っている沖縄文化資料の買戻しを計ることになり、既に軍政府に正式手続口であるが博物館課ではまず民間に散らかっている沖縄文化資料の蒐集と保護を計るべく、今般ひろく一般の古美術工芸品の所持者に呼びかけて協力を求めその所在を明らかにするためそれら文化資料の登録を実施することになった 即ち登録を要する文化資料は沖縄歴史に関する古文書、紅型、織物、書画、漆器、陶器、彫刻その他古代工芸品等であるが登録の実施方法は文化部博物館課から一般所持者に従順する外 ひろく所持者が積極的にこれらの文化財を持っていることを申し出るようにして貰えば同課が出張してその価値を鑑定のうえその資料を登録する 登録された物件は博物館課がその保存につき出来るだけの便宜をはかるようにするがいざれ重要美術指定の制度を設けて再調査のうえ沖縄重要美術品として指定し正式に登録されて永久的保存方法が考究されることになる なお登録された美術工芸品等についてはこれを文化部が強制的に取り上げたり、又は買い上げたりする前提ではなくせっかく祖先が遺し危く戦禍をくぐり抜けて沖縄の文化財だ その所在を明らかにして万一の破損や島外への流出を防いで永久的保護を加えると共にひろくその真価を再認識して一般所持者は沖縄文化寶財保存の誇らしい気持から率先してその所在を明らかにして登録を申し出るように同課では希望している なお現在のところ判明している有名品は首里米須家所蔵の自了の他 浮織打掛、那霸口吉良健氏所蔵の沈金手文庫、知念田口氏蔵 名工仲村渠の抱瓶等であり會ての沖縄図書館所蔵のいん元良(うずら図)も中頭某村に所在が判明しているとのことである。

## 25 第117号 1947年10月17日

### 売れる売れる沖縄みやげ

土産品売店は現在民政府内の土産品取扱所を根拠にして軍政府、泡瀬、嘉手納、ライカム移動売店を通じてクレイグ副長官のいわゆる沖縄、大島、宮古、八重山の自由貿易再開の第一歩であるとの建前で米人のし好勘案の上各島の製品を各々陳列取引させて漸次好調を示しているが、沖縄口本島の売品では矢張り壺屋の陶器が売行きの筆頭を示し、獅子小、ティポット（チューカー）酒セット、□□□、花瓶等、石川市□□□区で出しているグラスマット（ニクブク）も仲々の人気で製品がとても間に合わず紅房の漆器、屋慶名の阿旦葉製品、羽地の人形等の相当の売行きを見せてているがパナマ帽子が意匠や色彩に欠点があるのか意外に人気薄のようだ。注目すべきは大島の紬き口で 例えは戦前日本全国を風びした古い伝統を誇るあの大島つむぎが惜し気もなく在来の柄を捨てて軍政府あたりで働いている婦人のスカートなどにみられるような派手な格子柄に転じているのは流石に目のつけどころが早く九月十六日のエムデー売店に於ける売出し初日の如きは反六百七十五圓の繫柄が飛ぶような売行きだ 一方竹製品の死す、本棚、茶箪笥卓子等の実用家具類が又しっかりした細工でこれが入荷と売切れが一緒であるというぐらい引っ張り凧の有様である 宮古からは独特の久葉団扇、阿旦メリツバ等、八重山品ではワラビ製品のランチ、バスケット、マーニ製のフルーツ籠等が飾りものとして珍しがられている

## 26 第119号 1947年10月31日

### 中城城址を公園化しては だが然し経費は民で

中城城しといえは嘗て日本海軍の重要な寄港地であった馬天港や□□□をはじめ中頭島尻一円の眺望を一望に収める名勝の口してのその雄大な景観をたたえられてきたがこの城し一円を公園化したらという軍政府の意向がある。首里城も鳥有に歸し昔日の面影を残す沖縄唯一の古城してあり城内の建物は焼失したが城壁はところどころにある弾痕の石崩れのほかはほとんど□□の通り完璧に残り、この由緒ある護佐丸の古城が今は毎週土曜日曜には米軍将兵やその家族の遊行で□か□か賑わいを呈し、”国滅びて山河あり城春にして草木深し”の感傷などは微塵もなくヂープのしげく快適の遊覧地と化しつつあるが、去る15日軍政府将校ロターベッグ少佐は 歴史上由緒ある中城々址一円を沖縄の絶勝地とし国立公園の樹てられたら如何 との軍政副長官クレイグ大佐の意向を志喜屋知事に通達したが知事がつかさず 沖縄としても由緒ある城古城であり非常に結構なはなしだが肝心の経費は軍の方で考慮していただけまいか と問えば同少佐は 米国に於いても例えばワシントン誕生の地は一般の寄附金に依って維持しており公費に依る名勝地もなくはないが折角の名勝地由緒ある中城城址を沖縄の国立公園に仕立てるべく一つ貴下において名案を樹

てられては如何 と云うわけである。

## 27 第120号 1947年11月7日

### 蚕糸検定所近く設立

農家経済健全化のため蚕糸業の復興はきたいされているところだが現在飼育場も無いので桑園五五七町歩 養蚕戸数三三〇〇戸で年収繭額僅かに一万五千円という遅々たる歩みであり農務部土地生産企画課では将来桑園六千町歩 産繭額一二〇万円を目標にその健全な発達を図っているが十月七日付けで軍の承認を得たので近く真和志村松川の瑞泉社跡に蚕糸検定所を設け蚕業の強敵である蚕病の検査優良品種の普及及び蚕生糸の品質検定等を行うことになっているが蚕業が復興せば単に衣料繊維の自給というのみでなく貿易見返り品としての生糸の生産という点からも期待されている。

## 28 128号 1948年1月3日

### 新しき沖縄の年中行事を制定 科学祭その他イロイロと

民政府では先に設定した一年に七日の公休日を含め新たに年中行事を左の通り制定し新年度からひろく一般に奨励することになったが、 文化部編さんの行事表によると農事、宗教等に関する行事の外特に体育を奨励し文化を昂揚する建前から音楽祭、芸能祭、体育祭等を加え機動説のコペルニクス並びに蒸気機関のワット両科学者の誕生日である一月十九日を以て科学祭としており 仲秋の名月、菊の節句等も忘れてはいない。△一月一日年始□△一月七日七種粥△一月十九日科学祭△旧二月十五日麦穂祭△旧二月三十日上巳の節句△三月中旬彼岸△三月下旬音楽祭△四月八日菊花まつり△旧四月中旬害虫駆除日△四月二十四日□□□府創立記念日△五月二十八日復活祭△旧五月五日端午の節句△五月第二日曜日母の日△旧五月十五日稻穂祭△五月三十日靈口祭△旧六月二十五日稻大祭△七月四日米国独立記念日△旧七月七日七夕の節句△旧八月十五日仲秋の名月△旧九月九日□陽の節句△九月中旬彼岸△十月下旬体育祭△十一月中旬芸能祭△十一月下旬感謝祭△十二月二十五日クリスマス

## 29 129号 1948年1月9日

### 郷土芸術の誇り 向井文忠氏が沖縄博物館に寄託 自了・田名の逸品帰る

民政府博物館課では沖縄の文化資料蒐集のため課長山里永吉氏が再度大島に出張・調査にあたってたが、名瀬市向井文忠氏の所持にかかる沖縄関係古文書資料に就き沖縄に寄託品を折衝した結果、向井氏は心よく書画、陶器、漆器、彫刻名等八十七点の美術工芸品の寄託を承だく すでにこれらの品々は□ろう山里氏が持ち帰ったものであるが田名宗經、

自了等の貴重な資料がある。民政府ではこれらの管理に関し去る二十三日の軍民連絡会議に於てこれらの逸品を軍当局に提示して 志喜屋知事からこれら沖縄古文化財に就いては所有者向井文忠氏の好意の通り沖縄で恒久的に保管したい旨を懇願したが 軍当局はこれを諒として大島口口との連絡を約した。なおこれらの資料の重なるものは左の通りである。

△書画 神農図 自了筆と推定される 山水 鎮思九筆の推定 駿馬図 馬相筆 鄭嘉訓  
秘匿ノ書宜湾義保筆 □巻物 鄭元偉 (米ふつ) △陶器 知花焼四ツ耳壺 古我知  
焼竹型花生 南南蛮 亀型茶口 △漆器 蒔絵食かご 蒔絵手箱 革製八巻箱 △彫刻  
りゆう頭觀世菩像 (梅帶華、田名宗経作) 印籠5個 (田名宗経作) 根付 (田名宗経作)  
△雑の口 へん額 (源遠流長) 曲玉 (四十三個) ひうち石 (三個) たんけいの硯 その他

### 30 130号 1948年1月16日

#### 鐘よ再び響け！ 那覇市民に朗話 埋もれた由緒の鐘発見さる

今は昔、那覇見世の前に大がじゆまるや玄関造りの警察署があった頃のこと—警察の鐘楼につるされた鐘は朝晩時鐘としてまた、あの東町の大火、辻の大火の際には早鐘にかわって乱打され 六万市民と長いこと苦楽を共にしてきたがその後那覇署の県庁前移転とともにこの鐘は那覇市に移され、つい戦争直前まで市役所の尖塔に吊され市民にサービスしてきたが、那覇消滅と共にこの鐘はまったく市民の記憶から去って誰ひとりこれを尋ねるものもないが、新春早々この鐘の所在が究明し那覇市民を喜ばしている。

□□那覇電話交換局□訳上間新吉 (三十三) 君は□□大晦日の午後仕事を終えて那覇市役所の跡を師走の感慨に耽けつつ逍遙しているうち、はからずコンクリートの残がいの隅に昔なつかしい鐘がのぞいているのを発見。はてと周囲の石ころを取り除いたところりゆうのつり牙のついた那覇にとって由緒ある鐘と判明。さっそく那覇市では引き取って朝晩の時鐘にすることであるが、幕舎とぬかるみの町で聞く昔なつかしいこの鐘も今次大戦の伊太利アダノの鐘物語の如く一日も早く、平和な美しい町を建設してくれと七万市民に訴えて鳴り響くことであろう。

### 31 第141号 1948年4月2日

#### 松竹梅合同劇

松竹梅三劇団では昨秋俳優協会の設立をみ 演劇会の刷新を期したこととなつたが、今回その第一着として三劇団の合同劇を来る六日から那覇中央劇場を振り出し引き続き石川、首里、糸満、金武口の五箇所で興行することとなつた。なお出し物は山里永吉制作 “首里城明け渡し” と “父帰る” 其他で三座俳優八十名が総花式に出演する予定である。

### 32 第153号 1948年6月25日

沖縄郷土史由緒の地 中城々跡を公園化 米人遊覧者殺到、村民が美化作業

勝連半島と知念岬を抱かれ津堅久高を眼下におさめる沖縄郷土史由緒の口中城々跡は殆ど口のままの面影をとどめておりその勝景と相まって日曜日に二百人と下らないアメリカ人が訪れ戦後沖縄唯一の公園となっている。

戦後米軍が駐屯した関係上今は城し跡の広場まで自動車が入れるようになっている。なお同城しは公園としての管理がなされていないため夏草の茂るがままに荒れ果てていたが、去る十五、六日の両日北中城村の初校中等校並びに役場職員等が一体となって美化作戦に当たり気持ちよい遊園地にしたが更に今後も口北中城口村が協力して美化のために力を注ぐことになっている。

### 33 第164号 1948年9月10日

那覇の工芸展 洩らつたり復興色

焼土那覇に再生の息吹もたくましく繰り上げられる那覇市主催復興工芸展は十一、十二日の両日真和志村安里の沖縄製帽社で開催されるが、戦後最初の催しであり一般のメイカの人気をあうて出品殺到陶器漆器においては布袋和尚、四竹踊り等の装しよう用置物や日用品、木工では守禮門の彫刻等の異彩をはなち其の他模様品婦人帽、ハンドバッグ、靴の手芸品はじめ精巧な玩具類にいたるまで多種多様な技を競いさらに即売会やバザーの設備もあり盛況が予想される。なお十日は一般展示に先立ち審査並びに表彰式を行うことになっている。

### 34 第165号 1948年9月17日

八月綱曳

(糸満) 糸満町では旧八月十五日、九月十七日、恒例による大綱引が催される。当日は各団体の旗ガシラを先頭にしてチロコ隊や仮装行列が午後二時より糸満初等校より繰り出され午後六時より綱引に移ることになっており近在よりの見物人が殺到するものと見られている。翌十六日は糸満町青年会主催で全島沖縄相撲大会が午後一時より糸満初等校で催されるが、既に国頭久米島より力士の申し込みがありこれ又賑わいが予想される。

### 35 第165号 1948年9月17日

那覇工芸展 出品殺到す

郷土産業の復興時において躍進那覇の誇りとする手工業界のすいをあつめた那覇市主催復興工芸展は去る十一、十二日の両日沖縄製帽工場で開催されたが、戦後初の催しに全市

民の人気を呼び復興色に活気みなぎる会場は精魂かたむけた各種製作品に彩られてまさに技巧の祭典さながらの大賑わい。審査員も縫製品千五百四十六点に目をみはるという活況。戦前に劣らぬ優秀な製作品に業界の烈々たる意欲が遺憾なく発揮された。厳選の結果入賞は左の如く決定した。

△陶器一種 一等花瓶 沖陶 二等香炉（琉陶新垣栄吉）三等 飯わん（壺陶新垣栄秀）  
△陶器二種 一等酒セット（壺陶小橋川仁王）二等 菓子鉢（壺陶高江洲康幸）三等 チョウジ風呂（壺陶島袋常清）△しつ器 一等煙草セット（沖漆）二等カップセット（紅房）  
三等果物鉢（沖しつ）△鐵工 一等 蓋付鍋（那鐵）二等 改良ランプ（国場道かん）  
三等竿秤（那精）△木工 一等 京机（那霸市四区大嶺経達）二等 両袖ランプ（沖木島袋常幸）三等 やしろ（新田宗盛）△手芸 一等 男子パナマ帽（沖帽）二等ドライヤー（沖帽）三等 婦人パナマ帽（球帽）△雑之部 一等 玩具（那霸市一一区久場島玩具工作所）二等 織物（沖織）三等 獅子（那霸市四区国場真一）四等 人形（兼島玩具工場）五等 踊笠（那霸市一区嘉陽田朝清）

### 36 第170号 1948年10月22日

良き哉、芭蕉布

さきに沖縄視察に来島、台風直前東京に帰任したマ司令部琉球局長ウエカリング准将は志喜屋知事より贈られた大宜味芭蕉布を称揚して左の書信を寄せてきた。知事並びに民政府職員各位が自分の滞在中の多大なる援助を与えてくれたことに対し心から感謝します。ことに送って貰った芭蕉布の見本は有難く受取りました。早速これを妻にみせたところ大変喜んでいました。また近く沖縄へ行きたいと思っています。

### 37 第194号 1949年4月4日

首里城の石奪うなけれ

首里城内の沖縄大学敷地からトラックで石を大量に持出すのを目撃したミード軍情報部文教部長は民政府山城文教部長に対し大学敷地内の石は大学建設に使用する故厳重にこれを取締るように指示した。

### 38 第197号 1949年4月25日

沖縄文化の温存に在日本有志が大馬力 史料工芸品蒐集に資金募る

既報 マ総司令部琉球課から約一ヶ月の予定をもって派遣された比屋根安定氏はその後連日各団体職域講演座談会を開催し、去る二十一日は岩原盛勝氏同導民政府知事室文化関係口座談会を開き東京における文化運動につき左の如く語った。

沖縄文化の保存研究宣伝を目的として昨年東京在の沖縄文化研究者網羅して沖縄文化協会が結成され沖なわ文化資料の蒐集について日本は勿論米国にまで範囲を広げるべく野心的な活動を開始している。現在おもろの原本ペルリ日記原書も入手、東恩納寛じゅん氏所蔵の貴重口口史料等の保存等についても慎重に研究、また沖縄に口歴史や書画伯の作口口並る沖なわを主材した作品、複製頒布、沖縄回顧展の計画も進められており、沖なわ文化研究の権威者をもつてする講演会も開催され魚返教授の冠船に関する講演等有意義の示唆をもつものであった。柳田國男氏は同会の活動資金としてその著沖なわ文化叢説の印税を寄附した。なおい江朝助氏を会長とする沖なわ芸能保存会では先に読売ホールで琉球舞踊団発表会を公演、米軍駐軍で賑わい多大な好評を博した。

#### 39 第197号 1949年4月25日

##### 沖縄演劇文化研究所設立

現在職業芸能団体十有余劇場三十二カ所を擁して演劇運動の勃興が待望されること久しいが最近ようやくその機運が熱してきた感にありその一つの現れとして元文教校教官中今信氏を中心に沖縄演劇文化研究所が設立されることになった 同研究所は既に敷地を那は新市庁舎の東側に選定し事務所建造の運びにあるが観客二百めい程度収容する試演場 演劇図書室等の建造も計画されている同所では将来演劇人たらんとする研究生の参加を希望しているが今夏第一回の発表を口す予定 同所の事業は左の通り △研究会日曜日午後二時—五時 木曜日午後六時—九時

#### 40 第202号 1949年5月30日

##### 軍政府主催 全琉球美術工芸展

既報の軍政府主催全琉球美術工芸品コンテストの詳細要項が発表された△右工芸品コンテストは一般と生徒の二種に分け陶磁器 竹製品 藤製品 絵画（油或いは水彩）漆器 玩具及び人形其他の各部に分けて審査を行う△締切 七月十五日 出品場所は各市町村長に依頼中 △原料は純島内産 製作品はアメリカ的スタイルや花模様等をさけ純琉球的な模様が望ましい △審査は技巧 需要 単純性 特異性を規準とする △賞品は百圓内五口特賞

#### 41 第208号 1949年7月11日

##### 蚕糸会社復活

戦前沖縄は昭和十一年から十五年までの五カ年間に六七二万一三七六瓦 億額一四八万一〇三圓の蚕種を移出、農產品の重要な移出品として農家経済に寄与すること多大なもの

があつたが戦後施設並に優良原種を失い現在沖縄經濟復興の重要なポストを擔う該業の促進は各方面から期待され且つ蚕種入手の道を失った日本蚕糸会の沖縄蚕種輸入再開の呼応と相まって養種輸出熱の高まっている折蚕糸関係者の結集により資本金三百万圓の沖縄蚕糸株式会社、仮称が七月一杯に発足する運びとなり目下設立準備を急いでおり製造に要する原蚕種薬品、蚕具の中日本より輸入必要分は貿易庁を通じ注文済みであるがなおこれをそく進し輸出目標二十五万瓦製造を達成するために左の事項につき經濟部からミラーぐん政官を通じぐん政府へ △日本より一万八千蛾（五千瓦）の原蚕種及び蚕具、薬品の輸入、その他施設、資材建物敷地の斡旋を申請した

#### 42 第229号 1949年10月4日

##### 糸満町 恒例の大綱引 旧16日相撲大会

旧八月十五日恒例の糸満大綱引は六日午後五時から町端大通りで挙行南北両勢は午後一時初校々庭に勢揃い、旗頭を先頭に各種団体の旗頭と共に二時校庭を出発町内を練り歩いて前景気をつけ白銀堂に勝運を祈願、現場に繰り込む、町内人口一五、三四五 四区まで南八区までが北で南が雌綱北が雄綱、長さは各々五十間、中心よりそれぞれ三間引寄せた方が勝、五時と共に両ぐんシタクを乗せて堂堂出陣、両ぐんに試合開始を宣するカニチ棒係は最も重要な役割であるが今年は南から阿波根よう賢氏、大城英次氏、北から上原牛藏氏玉城益尚氏が選出された

#### 43 第232号 1949年10月14日

##### 史蹟を護ろう 軍も積極的に援助

成人教育課では史蹟の保存対策について去る十一日民政府會議室で協議したが ぐん側からぐん情報教育部ブレイク夫人、民政府側から又吉副知事、島ぶくろ官房、山城文教、富名こし情報の各部長、安里成人教育課長 新里教連主事 原田図書館長 民間側から豊平良顕 仲座久雄 名渡山愛順氏が出席 ブレーク夫人は「名所旧跡の保存は沖縄にとって最も重要な仕事で博物館の充実も焦眉の問題でありぐんとしては本事業に対して援助を惜しまない」と首里城其の他の名所旧跡保存を強調 当日出席者一同が名所旧蹟保存会準備会を結成 本月中に保存会を設立する

#### 44 第237号 1949年11月2日

##### まず石造建築物を保存 沖縄史蹟保存会発足

戦禍に荒廃した郷土の史蹟名勝古文化財並に天然記念物を現状のまま散乱さしては文化沖縄の面目上捨て置けない重大問題として民政府成人教育課の斡旋によって準備をすすめ

ていた沖縄史蹟保存会の結成式は去る三十一日午後二時より那覇市牧志町の沖縄青連本部事務所隣の那覇洋裁講習所で挙行 ぐん政府情報教育部ブレーク女史も臨席斡旋役の山城文教部長外成人教育課職員と民間約36名出席会則を審議決定後左記の通り役員を決定したが、したが、緊急を要する問題として石造建造物としての園比屋武御たけ、宗（崇）元寺石門龍たんれんごもよーどれなどの保存をはかることを決定ただちに事業へ着手する同会事業は会員の会費「年額五十圓」の外ぐん民政府の助成金そのた篤志家寄附によることになっているが同日出席のブレーク女史はいの一番に五十圓の会費を納入し一同を激励するところがあった なお同会では各市町村に支部を設置しこれを全沖縄じゅう民の文化運動として展開する △会長沖縄知事△副会長文教部長 美術家協会屋部憲氏 △じょうにん委員島ぶくろ全発氏外九名△委員四十九名△幹事仲座久雄外三名

#### 45 第244号 1949年11月10日

文部省の芸術祭に琉球の“舞踊”と“音楽” 留学生は優秀者を・日越氏帰来談

東京に於て開催された厚生省公衆衛生院での獣医関係講習会にぐん公衆衛生勤務の當山真秀氏と共にぐん政府より派遣された民政府経済部日越國吉氏は一昨日八十日振りに空路帰郷したが講習会の模様につき

日本全国から集まった講習員と共に畜産と関係のある病理学や細菌学、上下水道検査、魚肉の検査等の実習研究及び見学等を行ったが沖縄の施設とは余りにもかけ離れすぎてどう処理するかが問題である

と語ったが、なお同氏は沖縄財団から寄贈された三万五千円分の獣医関係の書籍二百五十冊を持参した 日越氏の談によると文部省しゅ催の芸術祭に「琉球の舞踊と音楽」も参加することになり舞踊渡嘉敷守良氏、三味線池宮喜輝氏その他沖縄芸能保存会が中心となり十一月十五、十六の両日、日比谷公会堂で開催されることになっている更に同氏は沖縄係として外務省勤務の吉田嗣延氏の談として「沖縄からの留学生はもっと優秀なものを送つてほしい、文部省では来春ハイスクール出身者から一五〇名ぐらいを留学生として採用する話がありその世話を早坂氏が或は選抜のため沖縄に派遣されるのではないかと思われる」と語った

#### 46 第248号 1949年11月15日

沖縄文化座談会

史蹟保存会では来る十七日午後二時から首里博物館で沖縄の古文化紹介等の沖縄文化座談会を開催する。

47 第266号 1949年12月6日

中城城址 米人遊園地に

五日午前九時三十分よりぐん政官府でセーファーぐん政官と志喜屋知事との初の事務打合せが行われたが中城々址の公園化について意見のこう換会が行われ中城々址にお土産品売店、休憩所など種々の施設をなし米人の遊園地とする計画で知事もこれが実現を急ぐことになった

48 第280号 1949年12月22日

琉球の唐獅子 近く軍政官府入口に

ぐん政官府では構内入口に琉球古来の名物である三尺ぐらいの大唐獅子をすえることになり工口課を通じ目下壺屋陶きに依頼目下製作を急いでいる なお戦前首里城その他にどかっと据えていた唐獅子は殆ど全滅し今は語り草のみとなっていたが 再現は一般からさぞかしか親しまれるであろう。

49 第280号 1949年12月22日

名所旧蹟 史蹟保存会が選定

史蹟保存会では来る二十七日午後一時から民政府知事室でぐんより指示された名所旧蹟の選定及び標識についてじょう任委員会を開き具体的に打合せを行う。

50 第283号 1949年12月25日

優勝の金カップは 松田の獅子舞へ

ライカム米婦人会の主催で去る二十三日午後一時半より二時間に亘りクリスマスの行事として全部隊参加の仮装行列大会を開催、此の日沖縄代表としてさきに民政府より推薦された宜野座村松田区青年会の参加し延べ一キロに及ぶ大型車二トン半等の車両に装飾される五十余の各部隊及び米各種団体の腕よりの連中が意匠をこらして華美多彩なる大絵巻を展開したが沖縄代表の松田区青年会 獅子舞のローカルカラーが断然群を抜いて頭角を現し第一位に入賞 同会より金カップが授与され絶賛の拍手を浴びた。

51 第285号 1949年12月28日

新春を彩る 軍政府主催工芸品展 特別賞にミシン機1台

ぐん政府主催の全琉球工芸品展覧会はいよいよ新春一月五日より八日迄四日間にわたって新装なれる首里の琉球大学で開かれる 出品作品は陶器 漆器 織物 編物 ちよう刻衣服 油画或いは水彩画其他の各部に分けて審査し優秀な出品にはそれぞれ賞品を送る

が各部を通じての最優秀品には特大賞としてミシン一台が贈られる 既に学童や一般からも続々出品があり北琉球から一〇六点 八重山から二十四点 宮古から二百点が送られている出品は一月二日迄に各市町村役所を通じて提出するように要望されており米琉人による審査員の氏名は近く発表される。

## 52 第286号 1949年12月29日

### お化粧いそぐ 中城々址 完成までにあと1年

ユーウェル軍商工部長はシーツ長官並びにセーファー主席ぐん政官の依頼で二十八日比嘉渉外部長を帯同、中城々址を視察したが城内の清掃はあと二週間もすれば完了、雑草を刈り取ったり石をおき変えたりするのに数日かかり子供の遊び場や土産品売店、果樹園、植物園も計画され完成までに一年も要する見込みでぐんの意向は出来上がり次第観光客を誘致する模様 ユーウェル氏は‘実に素晴らしい雄大な眺望で護佐丸愛用の井戸に水をたたえよ 石造門は古代ギリシャ ローマの建築美に劣らぬ立派なものだ’と最大級の讃辞を繰り返し、称揚した なお村当局では工事にあたってはぐんの援助を切望している。

## 53 第288号 1949年12月31日

### 希望と失意に明け暮れた 1949年よ！さよなら

戦禍にうちひしがれた荒涼廃きよの中に幾多の苦難を乗り越えて突進する復興への建設譜は明暗の二重奏をおりなし、今宵を最後に静かな終幕 希望と失意に明け暮れた一九四九年よ！再三の台風に苦難に満ちた一九四九年よ！さよなら！知念から那霸へ民政府を追つてたどりついで圓覚寺の巨鐘も民政府構内で待機久しぶりに那霸の夜空に百八煩惱解脱の除夜の鐘の音をおくるべくきのう撞木の取付け終り今は撞き手の篤志家を待っている。

## 4まとめにかえて——紙面から見れる米軍政府の「文化財観」

うるま新報創刊の1945年7月から1949年末までの54ヶ月間に刊行された288号にわたる紙面を対象に、今日で規定する「文化財」及びその周辺に関わる記事を拾いあげてみたところ上記の53件の記事が選出できた。

その記事の内容から本稿の目的である米軍政府の沖縄文化に対する関心や、戦後混乱時から復興時にかけての沖縄の文化財の状況について若干の考察を試みたい。その53件の記事の内容を一覧表に表したのが表1である。また、記事の内容を文化財の種別等の掲載頻度を表示したのが図1である。これらの図や表からつぎの4点の特徴をみることができる。

1点目は、無形文化財に関わる記事が全体の半数近くを占めるほど多いことである。無形文化財には工芸技術と芸能があるが、両者とも同じく10件を数え、両方に関わる記事が

表1 『うるま新報』に掲載された文化財関連記事一覧

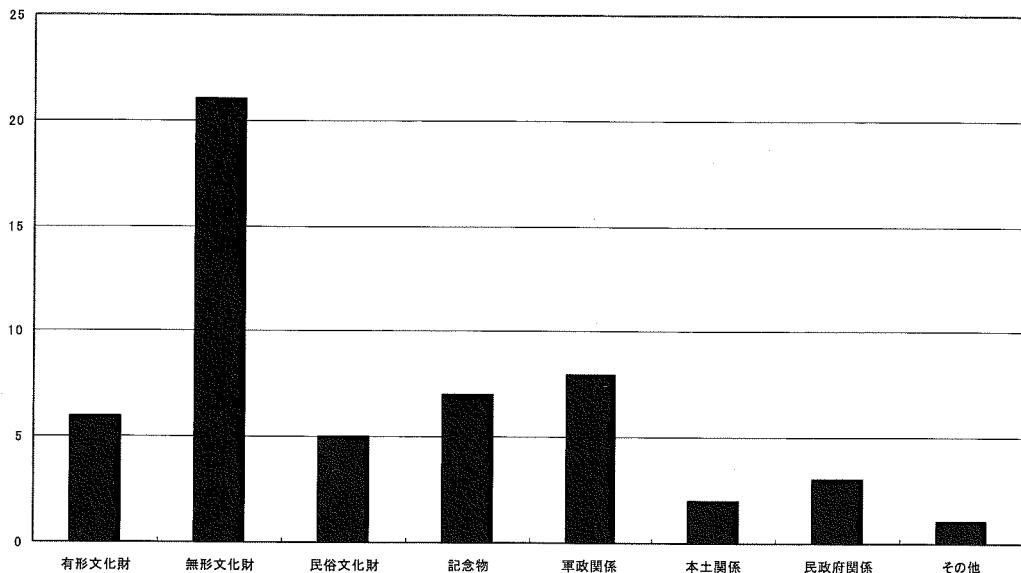
No.	号	発行年月日	見出し	分類
22	108	47年8月15日	圓覚寺の巨鐘 比島から還る	A
29	129	48年1月9日	郷土芸術の誇り 向井文忠氏が沖縄博物館に寄託 自了・田名の逸品帰る	A
30	130	48年1月16日	鐘よ再び響け！ 那霸市民に朗話 理もれた由緒の鐘発見さる	A
38	197	49年4月25日	沖縄文化の温存に在日本有志が大馬力 史料工芸品蒐集に資金募る	A
44	237	49年11月2日	まず石造建築物を保存 沖縄史蹟保存会発足	A
53	288	49年12月31日	希望と失意に明け暮れた 1949年よ！さよなら	A
			A データの個数	6
2	26	46年1月16日	期待する壺屋の復興	B
4	29	46年2月6日	舞踊と米得兵	B
7	54	46年8月2日	沖縄演技いろいろ 五日の米独立祭を飾る	B
9	66	46年10月26日	芸能団確立し—三劇団俳優に審査制	B
11	82	47年2月14日	記者団沖縄へ 郷土古典芸能舞踊で歓待	B
14	86	47年3月14日	芸能界自活へ 芝居は四月から興行	B
15	90	47年4月11日	きかな、郷土芸術 紅型陶器舞踊紹介 米人側から好評博す	B
18	102	47年7月4日	大宣味芭蕉も復活	B
19	105	47年7月25日	脚本募集 賦わう劇界	B
20	105	47年7月25日	梅劇団の美学	B
27	120	47年11月7日	蚕糸検定所近く設立	B
31	141	48年4月2日	松竹梅合同劇	B
33	164	49年9月10日	那霸の芸芸展 涙らつたり復興色	B
35	165	49年9月17日	那霸工芸展 出品殺到す	B
36	170	49年10月22日	良き哉、芭蕉布	B
39	197	49年4月25日	沖縄演劇文化研究所設立	B
40	202	49年5月30日	軍政府主催 全琉球美術工芸展	B
41	208	49年7月11日	蚕糸会社復活	B
45	244	49年11月10日	文部省の芸術祭に琉球の“舞踊”と“音楽”	B
48	280	49年12月22日	琉球の唐獅子 近く軍政官府入口に	B
51	285	49年12月28日	新春を彩る 軍政府主催工芸品展 特別賞にミシン機1台	B
			B データの個数	21
5	34	46年5月15日	親川の獅子舞	C
6	48	46年6月21日	糸満名物爬龍船競漕盛況	C
34	165	48年9月17日	八月納戻	C
42	229	49年10月4日	糸満町 恒例の大綱引 旧16日相撲大会	C
50	283	49年12月25日	優勝の金カップは 松田の獅子舞へ	C
			C データの個数	5
26	119	47年10月31日	中城城址を公園化しては だが然し経費は莫大	D
32	153	48年6月25日	沖縄郷土史由緒の地 中城々址を公園化 米人遊覧者殺到、村民が美化作業	D
37	194	49年4月4日	首里城の石奪なれ	D
43	232	49年10月14日	史蹟を護ろう 軍も積極的に援助	D
47	266	49年12月6日	中城城址 米人遊園地に	D
49	280	49年12月22日	名所旧蹟 史蹟保存会が選定	D
52	286	49年12月29日	お化粧いそぐ 中城々址完成まであと1年	D
			D データの個数	7
1	5	45年8月22日	仮沖縄諮詢会設立と軍政府方針に関する声明	E
8	62	46年9月27日	華麗なクリスマスカードで沖縄郷土色を紹介—軍政府委託で二万枚製作	E
12	85	47年3月7日	沖縄を理解せよ！各部隊に講座解説 意気込む米陸軍情報教育部	E
13	85	47年3月7日	沖縄占領初の報告 マ総司令部から発表	E
16	99	47年6月13日	高級美術作品初め 土産品販路を拡充 追々輸入雑貨なども取り扱う	E
17	102	47年7月4日	飛ぶよう売れる 購おう軍政府美術手芸品商店	E
21	106	47年8月1日	見事落第 新切手の図案に苦心	E
25	117	47年10月17日	売れる売れる沖縄みやげ	E
			E データの個数	8
23	115	47年10月3日	各界の学究を糾合沖縄文化協会生る 近く東京で“沖縄民芸展”を開く	F
24	115	47年10月3日	資料を蒐集 古美術工芸品も登録	F
			F データの個数	2
3	27	46年1月23日	沖縄教育部設立	G
28	128	48年1月3日	新しき沖縄の年中行事を制定 科学祭その他イロイロと	G
46	248	49年11月15日	沖縄文化座談会	G
			G データの個数	3
10	67	46年11月1日	嬉しや書籍一千冊 隣邦中国より寄贈 上海市教育局の厚情	H
			H データの個数	1
			総合計	53

凡例 A有形文化財、B無形文化財、C民俗文化財

D記念物、E軍政関係、F本土関係、G民政府関係

Hその他

図1 文化財の種別等の掲載頻度状況



1件あり、総数で21件と最も多く紙面を飾っている。

2点目は軍政府の政策に関わる記事が多いことである。うるま新報が、軍政府・民政府の機関紙であったことからその紙面掲載の頻度は多くなることは当然予想されることであり、当然の結果として捉えられる。中でもその傾向としては沖縄の郷土色のアピールに取る組む米軍政府の姿勢が垣間見れて興味深い。この中には軍政府管轄の美術手芸品売店の活況ぶりの記事が3点報じられる。このことは、完成品としての美術手芸品以前にその製作に取り組む者に注目すれば、無形文化財の啓発・推進という側面もあり、分類的には「無形文化財」のカテゴリーに含めてもいいものもある。ただ、ここでは軍政府の政策的・一面の方が強いと思われたので、その他の軍政府関連のカテゴリーに取り込むことにした。

3点目は記念物の話題が7件ある。うち、4件は中城城址のことでの人用の公園としての活用が叫ばれている。

4点目は有形文化財に関わることで、圓覚寺の巨鐘の返還や貴重な絵画彫刻が博物館へ寄託される話題など6件が含まれる。

ここでは、以上の4点の特徴を中心に米軍政府の沖縄文化に対する価値観、文化財保護に対する考え方、すなわち「米民政府の沖縄の文化（財）観」を検証してみよう。また、この時期は沖縄の人々による文化財保護・保存活動の動きが生じる時期と一致する。沖縄の人々にとっても文化財保護意識の芽生えがみてとれる。その契機のひとつが、沖縄史蹟保存会が結成されたことである。同会は石造建築物など記念物（史蹟名勝や天然記念物）の保存のために49年10月31日に発足した。沖縄側の文化財保護の動きも米軍政府の触発や、

民政府の牽引のもとに動き出すことになったのである。そのことは、戦争禍災のショックから少しだけ立ち直った沖縄の人々がやっと落ち着いて客観的に自らの周囲の社会状況、焼失した文化財などに目を向ける余裕がで始めるようになった、と理解されよう。

### （1）軍政府の無形文化財への関心

#### 一生活什器づくりの手わざ復興と人心ケアのための芸能団設立

##### ①工芸技術について

まず、53件のうち21件が無形文化財に関する記事で全体の約半数を占める。無形文化財といつても中味は工芸技術と芸能に分けられるが、両者とも同じ比率で扱われている。工芸技術が10件、芸能10件、両者に関わるもののが1件である。

工芸技術に関する初出は、第26号（46年1月16日）掲載分で、壺屋復興の記事である。

戦後ゼロからの出発時に、真っ先に食べ物を入れる容器や敷物などが必要であった。

諮詢会では壺屋と兼城の関係者をまず最初に移動させ、什器生産を担当させる計画で軍政府関係者に移動要請を行った。そこで壺屋の一角が解放され、約30人で1組を結成し、城間康昌を隊長に戦後最初のやきものが作られることになった。

仲宗根源和メモでは、「45年12月5日、那覇壺屋に特殊業者（陶工職人）125人が移動」と記される。当時諮詢会工業部長の安谷屋正量談によると、同年12月15日には大城鎌吉を隊長とする製瓦業設営隊130人が入り、12月20日頃火入れ式を行ったとされる。

壺屋復興の記事は翌年1月に記された。壺屋の一部解放により、住民生活は什器の確保を目的に工芸技術の復興から始まることになったのである。

45年8月22日発行の「ウルマ新報」第5号には、「仮諮詢会設立と軍政府方針に関する声明」が掲載されているが、労働の項目に「沖縄古来の特殊技能を継続する事業を奨励し沖縄の新生活状態に相応しき新技能を啓発する事」とある。また、同声明の教育の項目には「後日高等の教育特に職業及び工芸教育制度を設ける事」（下線部筆者による。）とある。壺屋復興の措置は、什器確保という切迫の要因があるものの、「沖縄古来の特殊技能の継続する事業」として捉えられたにちがいない。また、後に述べる軍政府監督、民政府経営の美術手工芸品売店の設置や全琉美術工芸品展など工芸技術の振興のための競技展覧会の開催は、45年8月の軍政府方針に基づく施策の中で位置づけることができる。

軍政府主催の全琉美術工芸品展や工芸品展のコンテスト大会は、工芸技術の再興や振興を図る上で軍政府の苦心が見える催し物である。うるま新報第202号（1949年5月30日）に掲載された「軍政府主催全琉球美術工芸展」の出品要領では「原料は純島内産 製作品はアメリカ的スタイルや花模様等をさけ純琉球的な模様が望ましい」（下線部筆者による）と純粹な琉球産の工芸品産出を望む姿勢を打ち出している。その背景には、民政府美術手

芸品売店の経営が成功し、軌道にのったことがあげられる。これら売店は米軍関係者への販売を中心としたものであったから、アメリカンスタイルよりは、彼らにとってエキゾチックな純琉球仕様のスタイルや模様が好ましかったのであろう。売店は軍政府、泡瀬、嘉手納の3カ所の設置からはじまった。これら売店は1947年6月16日から開店し、約1千点の品揃えで、初日の売り上げが額は数百弗と伝えられる（第102号・47年7月4日）。より沖縄的特徴を全面に押し出すことによって沖縄産出の土産品としての付加価値がつくことを米軍政府は奨励した。ちなみに、これら売店の小売価格は一般の流通価格より6割から10割の割り増しの価格が設定されており、その差額が民政府予算として繰り入れられた。

## ②芸能について

一方、もうひとつの無形文化財である芸能については工芸技術の振興とは大きく事情が異なった。諮詢会（民政府）文化部によって芸能団が設置されたからである。芸能団の設置目的は、軍や住民慰問を行うことにあった。さらには郷土芸能の振興にあった。46年2月6日付け第29号の紙面では、舞踊団は文化部の肝いりで発足し、米軍将校や住民の慰問巡演を行っている現場レポートが報じられている。また、46年10月16日には、適格審査に基づき、3つの劇団（3カ所）が設立され、郷土芸能の向上と民衆慰安に本格的に乗り出すことになった。劇団構成員である芸能音楽家に対しては、民政府文化部長により資格証明書が交付された。その数は50名（第66号・46年10月25日）。梅劇団（伊良波尹吉団長以下16名）、松劇団（島袋光ゆう団長以下16名）、竹劇団（平良良勝団長以下18名）の3劇団の本拠地は梅が知念、松が石川、竹が羽地と、沖縄本島を島尻・中頭・国頭の3地域に均等に配置し、住民に対して無料興行がなされた。劇団員の身分は民政府職員として位置づけられ、民政府予算から給料の手当がなされたのである。

戦争による傷痕癒えぬ民心のケアーこそが彼らに課された最大の使命であり、民政府にとっても、その監督官の軍政府にとっても、傷ついた人心の安寧を如何に図るかということが火急の課題であったといえそうである。

世の中が一段落付き始めた47年1月以降、劇団による歌舞劇の入場料は従来の無料から有料化へと移行される。47年3月14日付の第86号では、1ヶ月あたりの入場料実績が5回興行で28,817.7円の収入があったと報じられる。1回あたりの平均的興行額はざっと5,700円程度であったことがわかる。

そこで、民政府は軍政府指令に基づき4月1日以降の芸能団の入場料を削除し、すなわち民政府職員としての身分を解雇し、実質的に3つの劇団は民政府から独立した個人経営による劇団としての道を歩むことになった。

観劇の入場料は大人15円、子ども10円であったこと（注2）から1回あたり300名程度

の入場客を数えたことになる。

ところで、この入場料収入がどの程度の額であろうか比較してみよう。当時、花形的職種といわれた軍作業員の時間給が46年4月17日付けうるま新報第39号で記されている。この制度は46年5月1日から施行されることになったが、最高額が養成所教師・通訳・翻訳業務で2.30円。最低は非熟練労務者の普通労務者（普通人夫、農耕夫、造林夫、家事使用人女中洗濯婦料理人當男女、小使、下水人夫、徒弟）が60銭であった。したがって、1日8時間労働月25日間労働で換算すると、最高月額の場合460円、最低月額では120円となる。

しかしながら、演劇を取り巻く状況は決して甘くはなく、衰微沈滯化の状況にあった。民政府が設立を主導した手前、たとえ民営化された劇団とはいえ、そのような状況を見過すことができなかつた。その原因の1つを民政府は脚本の貧弱さからくるものと分析する。そこで、その打開のために第1回芸術祭用の演劇脚本を破格の1千円の1等賞金を掛けて募集したのである。題材は、軍政府を意識した内容にならざるを得なかつた。テーマは「再建沖縄を表現し民主主義なるもの、軍国主義的封建主義的なもの敵国人権の不平等卑猥なるものは不可」というものであつた。

戦後の芸能に関わる無形文化財は、人々の慰安という目的で始まった。工芸技術・芸能と無形文化財の技芸は戦後の復興期に時代の求めに応じ、その第一歩を歩みだしたのである。前者はまず、人々の什器の確保からはじまり、また沖縄に駐留する米人の土産品産業を支える技術として振興が図られた。また、後者は、沖縄人の傷心を安寧させる目的で、官営の劇団が設立されたのである。そのどちらにも米軍政府の戦略上の政策が反映されることになった。そして、軍政府の沖縄文化に対する価値観は、土着文化をアピールすることにあり、それこそが付加価値であるという認識であった。その認識のひとつを表す事例がクリスマスカード製作のエピソードにみてとれる。米軍ピーエックスは本国にクリスマスカード30万枚を注文するところ、クレイグ副長官からストップがかかった。民政府は同副長官の肝いりでそのうちの2万枚のクリスマスカード調達の仕事をもらうことになったのである。文化部で原画の絵を描き、工業部で商品化することになった。美しい沖縄の風土蒼空にくっきりと抜き出る棕梠に沖縄独特の草花を配したものや郷土玩具のチンチン馬小、ウツチリクブサー、今は思い出となった首里城の守禮門を描きだしたカードがそれである。沖縄駐留のための将兵が郷土の人々に送るために使用されたのである（46年9月27日・第62号）。

## (2) 史蹟「中城城跡」の遊園地化と沖縄史蹟保存会の結成

米軍や軍政府の関心は無形文化財のみではなかった。休息日に家族で出かける公園や遊園地の確保は、軍政府にとって重要な懸案事項であった。将兵に対する福利厚生の充実こそは、将兵のストレスを解消する上で必要な措置であったからである。そこで、注目されたのが、軍司令部から目と鼻の先にあった中城城跡であった。

ウルマ新報の紙面上では記念物に関する記事を7点拾い上げることができる。うち、4点が軍政府側からの中城城址の公園化・遊園地化の要望に関するものである。

その初出は47年10月31日の第119号の紙面であった。10月15日軍政府将校が「歴史上由緒ある中城城址一円を沖縄の絶勝地として国立公園にしたら如何」というクレイグ副長官の意向が志喜屋知事に通達された。しかばと、知事がその整備経費は軍の方でご負担いただきたいとお願いしたら、アメリカのワシントン生誕地の例をたとえに、人々の寄附を活用するなど民政府で名案を考えてほしいと、うまく逃げられてしまった。この時すでに中城城址は毎週土日曜日は米軍将兵やその家族の遊園の地となっていたのである。戦後沖縄で最初にできた公園は、中城城址であった。続報の48年6月25日付けの第153号では、日曜日に2百人を下らない米人が訪れる状況が伝えられる。草も伸び放題の状態に北中城・中城両村の児童生徒や役場職員によって美化作戦が展開されたことが報じられる。

軍としても、米将兵によって沖縄の貴重な史跡が汚されることに危機感をいただきつつある時期であったかもしれない。民政府成人教育課では、49年10月11日に民政府会議室で史蹟の保存対策について協議がなされた。軍側からは軍情報教育部ブレイク夫人が出席、民政府側から又吉副知事、島袋官房、山城文教部長、富名腰情報部長、安里成人教育課長、新里教連主事、原田図書館長、民間側から豊平良顕、仲座久雄、名渡山愛順氏が出席した。席上、ブレーク夫人は「名所旧跡の保存は沖縄にとって最も重要な仕事で博物館の充実も焦眉の問題であり軍としては本事業に対して援助を惜しまない」と首里城その他の名所旧跡の保存を強調した。当日出席者一同によって名所旧蹟保存会準備会を結成されことになり、10月31日に沖縄史蹟保存会（会長知事、副会長文教部長）を設立する運びとなった（49年10月14日・第232号）。「戦禍に荒廃した郷土の史蹟名勝古文化財並に天然記念物を現状のまま散乱させては、文化沖縄の面目上捨て置けない重大問題として」の認識によるものであった。

この戦後初の本格的な文化財保存保護の民間組織の結成は、後の琉球政府文化財保護法成立の伏線になるものとして意義づけられる。当時、保存会の組織化にあたっては民政府文教部成人教育課があたり、その斡旋によって実現した。が、その背景では軍政府の強力な指導があったものと思われる。また一方で、民間側の動きも確認しなくてはならない。首里市文化部出身で戦後いち早く首里市立郷土博物館づくりに奔走した豊平良顕をはじめ、

琉球建築に造詣の深い仲座久雄、画家名渡山愛順氏がこの組織の主要メンバーに加わっていたからである。沖縄の知識人・文化人が文化財を取り巻く現況について危機意識を持っていたことも組織設立の背景の一面として捉えなくてはならないと思われる。

軍情報教育部の「本事業に対しては援助を惜しまない」という言質は保存会の結成にあたり、財源的な裏付けを与えるもので、その実質的活動にとって追い風になった。早速、緊急を要する問題として石造建築物としての園比屋武御嶽、崇元寺石門、龍たん、よーどれなどの保存を図ることが決定され、直ちに事業へ着手することになったのである。

### (3) 有形文化財の返還と博物館への資料寄贈

沖縄県立博物館は、現在梵鐘・銅鐘を12口所蔵している。そのすべてが国・県指定文化財（工芸品）である。その中でもっとも迫力のある巨鐘が旧円覚寺楼鐘である。この鐘は県内最大の梵鐘である。高さ206cm、口径119cmもある。ゆうに1トンは越えるものだと思われるが、誰もその重量を計ったことはない。この鐘は1978年（昭和53）に国指定重要文化財に指定された3つある旧円覚寺の鐘のひとつである。

現在その鐘は、当館前庭の鐘楼に吊り下げられる。年1回、11月3日文化の日のみ、「円覚寺の鐘を鳴らす会」という団体によって夕方からの一時、一般市民に解放される。かねがね、どうしてこの重要文化財だけ外に設置されているのか疑問であった。もともと楼鐘であるから、外の鐘楼につりさげられるのが自然であると云われればそうである。

実はこの鐘は、戦利品としてフィリピンのマニラへ渡り、もどってきた梵鐘である。軍政府初期の海軍統治時代の教育部長であったハンナ少佐が帰国の途、マニラでこの鐘を見出し、返還されたと聞く。「沖縄民政府会議録」によると、1947年9月に返還され、志喜屋知事が受領書にサインしている。

うるま新報において、有形文化財に関わることで記事になったのは、この鐘の返還が初めてである。47年8月15日付けの第22号では、つぎのように報じている。

8月22日の軍政府政治部長レイトン中佐の談に依れば、この巨鐘は現在フィリピンに健在し、米海軍軍政府管下時分に腕に錨を入墨した海兵隊が戦利品としてフィリピンに持つて行つたが、今度軍政府の斡旋により郷里沖縄に帰り、住民と相見えることになるとのことだ。民政府では大典寺跡に残存する鐘楼を民政府庁舎前のロータリーに移し、この巨鐘を吊し時鐘にするとのはなしである、と。

49年12月31日付け第288号では、「知念から那覇へ民政府を追つてたどりついた円覚寺の巨鐘も民政府構内で待機、久しぶりに那覇の夜空に百八煩惱解脱の除夜の鐘の音をおくるべく、きのう撞木の取付けが終り、今は撞き手の篤志家を待つてゐる」と報じられる。この鐘は1953年に龍潭湖畔の民政府立首里博物館に移管された。

『琉球教育要覧』（1955年度版）によれば、1954年当時の首里博物館の観覧者及び収蔵品状況はつぎのとおりとなっている。琉球人34,949人、外国人2,682人、日本人1,963人。収蔵品数は、1,387点である。戦後石川市東恩納に設立された戦後最初の陳列館（博物館）であった沖縄陳列館は翌年民政府所管になり東恩納博物館と名称を変更した。また、同じ頃、首里市によって首里汀良に設立された首里市立郷土博物館も民政府に移管し、沖縄民政府立首里博物館と改称される。1951年当時の首里博物館の収蔵資料では639点の資料が重要美術品として数えられている。46年の創設から2年後1948年頃、博物館は破壊を免れた古美術としての文化財の資料収集に奔走した。1948年1月9日付けの129号では、民政府博物館課の課長山里永吉が大島まで駆け回って、貴重な資料の寄託・永久貸与の約束を取り付けたことが報じられている。名瀬市の向井文向氏資料87点が首里博物館に寄せられたというのだ。王府時代の琉球画壇を代表した自了や田名宗経の菩薩像などの貴重な資料が他県のコレクターの理解と協力により沖縄に戻された。

#### （4）本土側の動き・沖縄の動き

この他府県からの援助の手助けは向井氏のみにとどまるものではなかった。沖縄救済の目的を兼ねて東恩納寛惇や仲原善忠など東京在住の沖縄出身著名文化人が中心となって、柳田国男、折口信夫、新村出、田辺尚雄、柳宗悦、稻垣国三郎氏など沖縄研究の権威を網羅して沖縄文化協会が設立されたのである。1947年10月3日付けの第115号では沖縄文化協会の発足につき、志喜屋知事あて便りがもたらされた、と報じている。同会は沖縄古典の蒐集にあたり、（球陽）の復刻や、折口信夫氏の講演、柳宗悦等が沖縄民芸関係の展覧会を催し沖縄文化の紹介に乗り出した。また、49年4月25日付けの第197号では、沖縄文化協会が結成され、沖縄の文化資料の蒐集について日本は勿論、米国にまで範囲を広げるべく野心的な活動を開始し、現在おもろの原本ペルリ日記原書も入手したとされる。また、同会の財政的な支援について、柳田国男氏は同会の活動資金としてその著作である沖縄文化叢説の印税を寄附した、と記される。

多くの他府県出身の沖縄研究の先人たちによって、戦後沖縄の教育文化の振興が支えられたのである。

その一方、沖縄側の動きは、郵便切手・葉書の図案がすべて12世紀から1879年まで琉球を支配した王朝（尚家）の象徴する左3ツ巴や王冠、黄金のかんざし、守禮門など王朝文化に因んだもので、時勢にそぐわず人民とは無縁のものとの理由で復古調すぎるということで軍政府の承認をもらえなかつたりと、軍政府の考え方方に翻弄される状況がみられた。

これらの53件の記事が戦後の文化財やそれをとりまく社会状況を忠実に反映していると

はいいきれない。が、少なくとも情報が限定された戦後の混乱期において、うるま新報の報道は米軍政府や沖縄民政府の機関紙として、たとえ検閲などの制約や制限があったことをさしづいて考えても、またその時代の世相を語る資料として断片的であったとしても、終戦当時の社会の混乱状況や文化財を取り巻く社会の状況を知る上で、一級資料として位置づけらよう。

戦後4年半の沖縄の状況下で、文化財の世界において工芸技術や芸能に関わる無形文化財の復興がいち早く行われたことは大変興味深い。壺屋の復興は什器確保という実生活の必需品の調達として手わざが求められた。また、松竹梅劇団の官営劇団の設置は、人心の安寧を求めるためのものであった。そのどちらも米軍政府によって手始めにやらなければならなかつた人心安定政策の一環としての戦後処理施策のひとつとして位置づけられるものといえそうである。また、中城城跡の保存に関しては、史跡としての文化財の保存というよりは軍人やその家族の遊園地として捉えられた。いうなれば、福利厚生施設のひとつとしての公園整備が米軍からいち早く要望がだされたことは意外と知られていない。この米軍の史跡観すなわち、文化財保護法で今日提唱される「保存活用」への関心が、沖縄史蹟保存会設立の契機の一因になったといってよい。軍政府の所管は情報教育部、民政府は文教部成人教育課であった。志喜屋知事を会長に、県下市町村に支部を置く本格的な全県組織であった。同会の手始めの仕事は、園比屋武御嶽や崇元寺石門などの石造建造物の保存を図り、緊急に修理する事業の採択であった。戦後4年後の1949年10月31日の沖縄史蹟保存会の結成こそは、戦後の文化財保護活動期のもっとも大きな動きとして捉えられる。

戦後いち早く復活した糸満の爬龍船競漕や獅子舞、八月綱曳など全島で民俗行事が復活している様子がわかる。民俗文化財に関わる記事は5件しか掲載されていないが、それらは糸満や田井等など地方特派員常駐地近辺からの報告によるものである。特派員が不在の地域や遠隔地域など取材が困難な地域などの行事は取材不能であったため記事として掲載されなかつたのであろう。

戦後の混乱期に米軍は沖縄の統治政策を模索し、沖縄住民による民政府も米軍の方針を一つずつ見極め確認しながら、復興に向けて歩むことになったが、残欠の文化財処理を含めた沖縄の文化財保護に対する考え方は両者に隔たりはなく、むしろ軍政府がより積極的に沖縄らしさを強調する傾向にあったといえそうである。

## 注記

注 1 「沖縄県の文化財保護史—昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に」『沖縄県立博物館紀要』第26号（2000） 148—149p.p

注 2 1951年3月21日付けの松劇団提出の「興行届」には税込みで大人拾五円、小人拾円と記される（当館所蔵伊藤氏寄贈資料）。

## 参考・引用文献

『縮刷版うるま新報』第1巻 1999年4月28日 不二出版

『縮刷版うるま新報』第2巻 1999年5月20日 不二出版

安仁屋政昭編著『沖縄戦再体験』1983年4月25日 平和文化

新崎盛暉「米軍占領下『うるま新報』」『縮刷版うるま新報』第1巻 1999年4月28日 不二出版

園原 謙「沖縄県の文化財保護史—昭和初期から琉球政府時代の活動を中心に」『沖縄県立博物館紀要』第26号 2000年3月31日沖縄県立博物館

上江洲敏夫「破壊された文化財と還ってきた文化財」『甦る沖縄—戦災文化財と戦後生活資料展』（図録）1995年6月20日 沖縄県立博物館